



しんごうかいづかしゅうへんはやし  
新郷貝塚周辺林の  
クヌギとコクワガタ



# 新郷貝塚

川口市大字東貝塚 25

家族みんなで楽しめる

# 赤山 塗り絵

新郷貝塚(新郷若宮公園)は埼玉県を代表する縄文後期から縄文晩期の貝塚遺跡で、今から4000~3000年くらい前には、縄文時代の人々が暮らしていた遺跡です。縄文時代には関東平野の奥まで海が来ていて、新郷貝塚の近くにも海がありました。そのためこの周辺にも竪穴式住居がたてられ、そこで暮らしていた人たちが貝がら、魚の骨や動物の骨を捨てていた場所が現在の新郷貝塚になります。新郷貝塚からはサザエ、ハマグリ、シジミなどの他に、シカやイノシシ、クジラの骨と土器や土俵・石器も見つかっています。



新郷貝塚は南北150m・東西120mの大きさで、馬のひづめのような「C」の英字にも似ています。形をしています。明治26年(1893)に東京帝国大学の鳥居耀蔵博士が最初の発掘調査を実施しました。現在の新郷貝塚は新郷若宮公園と呼ばれる公園になっていて、松やクヌギ、ムクノキ、コナラなどの林になっており、鳥類や昆虫にとって憩いの場所になっています。



新郷若宮公園

# クヌギ



クヌギの木はブナ科コナラ属の落葉広葉樹で、ほかのブナ科の木とともに「どんぐりの木」とも呼ばれています。名前は「国木(くにぎ、国の木)」または「食ノ木(くのき)」が由来だと言われ、縄文時代によく食べられていたどんぐりの実を食らせるほか、木材としても使われてきました。ほかにも落ち葉は腐葉土の材料として肥料になり、枝は薪に、幹の部分はシイタケなどのほだ木としても使われ、縄文時代からとても身近な「国の木」として、里山(さとやま)の木々を代表する樹木になっています。



また幹から出る樹液はカブトムシやクワガタ、チョウヤガヤスズメバチの好物で、季節の昆虫が幹に集まっているのを見ることが出来ます。

# コクワガタ

コクワガタは名前のおと「小型のコクワガタ」として知られるクワガタムシ科の昆虫ですが、大きなものは5cmを超えることもあります。日本のほぼ全国で見られるクワガタムシで、大きなあご(角)の内側に、出っ張りやギザギザのないものはヒメクワガタとも呼びます。オスは1.6cm から5.5cm くらい、メスはあご(角)が小さく2cmから3.5cm くらいの大きさです。成虫はクヌギやコナラなどの樹液が好物で、幼虫もこうした木の朽ち木に住んで、その柔らかい部分を食べています。



コクワガタ(メス)



コクワガタ(オス)

カブトムシやクワガタが多くすんでいる新郷貝塚のコクワガタは、朝の日の出から6時までの早い時間帯、または夕方の方の暗くなる前にクヌギの木のまわりや、落ち葉の中にあることが多いようです。新郷貝塚周辺では5月の終わりごろから10月の最初くらいまで、コクワガタが多く見られます。